
真・恋姫夢想 蒼の槍、銀の剣

日進月歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫夢想 蒼の槍、銀の剣

【Nコード】

N6394R

【作者名】

日進月歩

【あらすじ】

つまらない人生に嫌気が差していた本望 蒼兎「ほんもう あおと。千載一遇の死のチャンスをつちりとモノにした自称いやほんともう嫌気が差したんです予備軍の本望は輪廻転生を経て真・恋姫夢想の世界に転生する事となった。『おおーこれが輪廻転生ってやつか』と、退屈しそうにない人生に彼はハイテンションとなつて――
――？神様にあつた一般人が、三国志の武将に対抗できる秘策とは――
――？馬鹿みたいに騒ぐ阿呆な作品です。主人公は何気に才能があつてなんとかいけるんじゃないかね？みたいな強さにする予定です。

ステータス。(前書き)

ステータスです。あくまでパラメーター上ですので……

まあ、日進月歩の作品を見ててくださいね

ステータス。

前世 本名 本望 蒼兎

今世 名 韓玄 字 本望 真名 蒼兎

三国的なパラメーター

カンスト、6まで

武力 5

知力 6

統治力 4 （将軍にはなれます）

運 5 （くじ引きに3回連続で当たるかもしれない、微妙な運）

F a t e 的ステータス

筋力 A + 魔力 E +

敏捷 A + 幸運 B +

耐久 C + 宝具 E + （無名の為）

保有スキル

いのちなげだすかくこ
危険思想

大切な人の為にすべてを投げ出す覚悟、全ステータスが気持ち次第でいくらでも増加する。
ある意味で最強なスキル。けっこー強い。

チート
神様の加護

一部ステータスが強制アップ。後に鍛錬によりさらにランクアップ。

いくなりちやうど
戦上手

格上の相手と戦うときに全てのステータスが1ランクアップ。

ブラインドをかけて
火事場の馬鹿力

緊急時に、筋力、敏捷、耐久が2ランクアップする。

バーサーク
狂気

狂気に襲われる可能性あり、狂ったときは筋力が1ランクアップ

死を体験した者

死が迫ってるものに対して極度に緊張する。

容姿

爽やかイケメン、
だけど目付きのせいで爽やかっぽくない

ステータス。(後書き)

以上です！如何ですか？

ブログ&ご挨拶（前書き）

どうも、日進月歩です。

この作品を書いている時でも《日進月歩》、日々精進できるよう頑張ります。

それでは、どうぞ？

ブローグ&ご挨拶

思い返してみると、とてつもなくどうでもいい人生を送っていた気がする。毎日つまらない学校に行き、汗をぬぐいながら懸命に動いている野球部を尻目につまらなく帰路に着き、取り立てて特徴のない平凡の二文字がこれ程似合う奴は居ないだろうと自分でもおもっている親友とともに話し、別れ、家に帰ると母親が笑顔でおかえり、と言ってくれるが、生返事で自分の部屋に行き、つまらない勉強をして、つまらない日々を過ごしていた。

そんな俺だが、今最高にハイになっている。勿論、薬に手を染めたわけではないが、この状況に興奮している。なんだってこんな、小説にしか出てこないシーンに出くわしているんだから。

横断歩道で、ボールを追いかけている男の子、近くには、大型トラック。運転手は…寝ている。

「ははっ…なんだってこんな所に出くわすんだ…」
乾いた嗤いと共に自分の災難を恨む、しかし、心の奥底ではこの状況を楽しんでる自分もいることに、気づいている。

男の子はボールを追いかける足を止めずに、運転手は眠りこけて、俺は……

「ああっ！もう畜生っ！」
恨み言が再度、口を押しつけて出てくる。この、くそつまらない日常を打破してくれるトラックのエンジン音を聞きながら、自分の唯一無二の特徴でもある足を徹底的に酷使して、男の子を救いに走る。

男の子は此方に向かつてきているトラックを見て、迫力に押されたか、その場に座り込んでしまった。

トラックとの距離は僅か、俺が男の子を救って自分自身も助かることは不可能だと、本能が警鐘を鳴らしているが、そんなモノがどうしたと言わんばかりに足を動かす、手を伸ばす。

この、くそつたれな日常を壊すために、この、暇すぎる日々を自分の死を持って終わらせられるのならば、半ば危険な思想を持ち合わせた本望 蒼兎は嗤いを堪え、走り続ける。

伸ばした手は男の子の服に引っかかる。後ろには間違はなく死を積んだトラックの気配を感じながら、自身の死を狂乱することなく受け止めている自分を考えて、ああ、俺はどこかイッてるんだ。と今更感じ、俺はくだらない自分と犠牲に生きる男の子の将来が幸多き物であることを祈りながら、静かに、且つ素早く、永遠の様に引き伸ばされた時間のなかで男の子の体を歩道に投げる。

「……これが走馬灯、というやつなのか。案外、楽しいじゃないか」最後に、ほんとにくだらなかつたな。と思考をし、思考停止して自らの死を受け止めた。

そうして、本望 蒼兎の僅か18の人生を終える事となった。

ブログ&ご挨拶（後書き）

感想、評価お待ちしております。

さあて、次回！？

死を受け入れた本望は、テンプレ通り神様に会えるのか？と意気込むが、眼を開けて飛び込んできた風景は――？

見てくださる方々、本当にありがとうございます。

それでは、日進月歩、精進していきます！

第一話（前書き）

どうも、日進月歩です。

こんな状況ですが、書かせていただきます。

第一話

周りは黒く、塗りつぶされていた。

その中で、俺は立っていた。いや、立っている。という認識は間違っているかもしれない、なぜなら、この空間には、凡そ、《地》という概念が存在しない。そして、《空》という概念も存在しない《無》の空間、《無》なのに俺という存在が在ることに矛盾を覚えながら、周りを見る。

当然、先述通り、黒く塗りつぶされているので、何もかもが分からない。

「っああ……」

ふと、脳に最後の記憶が刻まれた。

男の子を助ける、なんて非日常的なシチュエーションに興奮し、嬉々として助けに入り、そして、死んだ。

しかし、死んだ筈の俺がここという空間に生きていることがまずあり得ないはずだ。

「まあ、そんな事考えていても仕方が無いことか……」

そう呟いて、思考を放棄する。

そのまま、この空間に全てを任せようとすると、

“ ちょい、あんだ。 ”

空間に音が存在した。…尤も、先ほど俺は呟き、それが自分で感じ

られたのだから当然か、と納得した。…一人で

“なあ、あんただよ。本望 蒼兎、あんた、この世に未練は無いのかい？”

また、空間に音が発生した。

それに、音の持ち主は、女っぽい声をしていた。そして、何故…

「なんで、俺の名前を知っているんだ？」

“おお、漸く反応してくれたか、まあ、テンプレ通り、自分神様なんで、よろしく”

「へえ、神様なんだ。それで、自称神様は一般人の本望 蒼兎に会った？ねえ、馬鹿なの？」

“さらりと神様を侮辱したことは置いといて、もう一回聞くんよ？本望、この世に未練は無いのか？”

「ねえ、自称神様？」

疑問を口にしてみたくなった。

“なんだ？本望”

「ここどこ？」

“あんたは、まず私の質問に答えてもらおうか”

「そうだったな、でも、ここ何処？っていう質問に答えてくれないと俺、不安で不安で泣いちゃうよ？ウェーンウェーン…あーあ、泣

「いちゃったよ、どうしてくれるの？自称神様」

“おお、すまんすまん。……ってなんで私が謝っているんだ？つうかお前全部棒読みだぞ”

「ふう…疲れるな」

“てめえは私の質問を聞けえい！”

あら、キレちゃったな。どうしよう

“これで質問に答えなかったらお前、この空間に一生放置ね”
神様は、俺を試すかのように聞いてくる。

胸を張って言える事を多少嘘混じりでも言ってみる。

「それは勘弁、で、確かこの世に未練はないのか？だっけ…未練たらたらだったら男の子命捨てて助けにいけると思ってるの？」

これで、9割本音だからバレないかなーと思っていると、

“ふうん、なかなか面白いじゃん。未練はないと言ったね？”

「いや、結構あるけど」

“あるんかい！！”

自称神様のツツコミが痛い……

「で、はい。質問終わりましたけれど、なんで俺に会ってるの？」

“ううーん、興味半分で会ってみたくなった。”

……このヤロウ。俺は今、ここで神を殺すと決めたんだ。

「ここから出して、それだけが俺の願いです」

“ほい分かったよ、願い事は一つだけな”

「まじかよ！一つだけかよ！」

“その一つだけの願いもここから出る。という願いで潰えたんだけどね”

口は災いの元とはよく言ったものだ。この口を封じてしまいたいよ。

「はあ……」

溜息しかでてこない。

本望 蒼兎という存在はここで消えるのかな。と思う。

「なあ、俺は次に何処に行くんだ？」

“秘密、ちよつと面白そうだもん”

「教えてくれませんかねえ？」

“やだ。つーかどこ行くのか私にも分からないもん”

「はあ！？お前……本当に神様？」

“失礼な…十分神様（見習い）だよ！”

「神様の後に余計な物が付いてる気がする。」

“気のせいだね”

「さいですか……だいたいの所も分らないの？」

“っああ、うん、見てみる………”

五分後（といつても、時間の概念が存在するか怪しい）

“お、見えた。なんかねー争ってる。戦乱の世の中みたいだね。”

「……………マジ^{マジ}本気？」

“マジマジ………どんまいっ！”

……………決めた。こいつを脅す。

「ねえねえ、神様」

“な、なにかな？”

声の質が変化したのを感じ取ったのか、すこし狼狽えている。

「こんな戦乱の世の中に俺を送り出すんだよね」

“そ、そうだよ。でも、転生なんだから仕方がないよっ！うん、きつとそうだよ”

「そっか、なら仕方が無いか」

“それにさっ、神様だって身分があるというか……ってえ？”

「うんうん、神様に文句言ってたって仕方が無いよね……」

“ そうだよ、仕方が無いよ！”

さつきまでの狼狽えは何処に行ったのか、元気な声を出している。

…………… 余計、むかつく

「でもさあ！この怒りを何処に持っていけばいいのか分からねえよ！なあ！！神様！？」

“ ちょ、怖いって本望、分かった、分かったから！”

「な〜にが分かったんじゃこら！おい！！」

“ 願いこと三つに増やしてあげるから、怒らないでくださいオネガイシマス”

後半、カタコトになったが華麗にスルーの方向で。

「んじゃ、遠慮なくいきますか！

…………… 一つ！俺に武器をくれ、種類は槍と剣。色はそれぞれ蒼と銀！」

“ ワカリマシタ”

「二つ！俺の能力にプラス補正をかける、尚、それは脚力と、筋力、それと頭脳にだ！」

“ 了解シマシタ”

やばい、本当に神様がイツてるかも…

まあ！俺のせいじゃないからね、自業自得ってやつさ！

「んじゃ、最後の願い、

……これは保留で」

“ウン、ワカッタヨ……………ってマジすか！”

こいつショックのあまり元に戻りやがった。

「これで、俺の願いはおしまいかな」

“分かった、それじゃあ、弾くね”

「弾く？……………ああ、転生させるってこと？」

“そそ、あと、注意、何処に行くか分からないから気をつけて”

最後に、ふざけたことを言いやがった神様（声だけ、登場なしという可哀想な存在）は、

「おわっ！」

四方から迫ってくる《黒》に押しつぶされた。

……だつてさ、普通は落とし穴でバイナラーってところでしょテンプレで行くと

泣けてきた。

俺の意識は、そこで、暗転した。

「あら、元気な坊やねえ」

「バブツ！（はぁ！？）」

「ハハハッ、元気な子じゃあないか」

どうなってんじゃ、おい。

第一話（後書き）

日進月歩です。

未永くオネガイシマス。

第二話（前書き）

どーも、日進月歩です。

ガンガン書きたいです。

第二話

苦しかった日々を、ダイジェストでお送りするぜ！

2歳、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・割愛、本当に耐えられなかった。意識があるのに！意識があるのに飲まされるんだ！記憶なんか要らないから他のものをくれ！

4歳、未だ、拷問の日から抜け出すことは叶わなかった。腕に抱えられてよしよしはやめて欲しかった。

6歳、漸く、自分の意思を示すことが出来た。それと同時に、筋トレを開始し始めた。もちろん、親には内緒でやってた。だが、母親に気付かれてしまったが、「体を壊さない程度にな」と残し、去っていった。父さんには言わないでくれたらしい。サンキュー、母さん！

8歳、近所の友だちと、遊びながら、自身の力を確認していた。犬と並走できたのは新たな発見だった。その後、母さんに「どうやったの？教えなさい！」と3時間余り尋問されていた。それを俺は、「犬が怪我していた」だの、「犬の尻尾に捕まってた」だの、いろいろな事を言って、誤魔化した。

10歳、両親に、武術の指南を頼んだ。父親は、「ハハハッ、ついて来れるか？」と、訓練用の竹刀でボコボコのズツタズタにされて、母親には、「戦場でくたばるのなら、此处でくたばりな！」と、格闘でフルボッコされた。

日々を過ごしていくうちに、戦闘方法は叩き込まれたし、あらゆる
武具に通じた。

ちなみに、母さんは一流の武将で、父さんも、母さんから教わって、
武将とさえ渡り合うことが出来る力を得たらしい。

そして、１５歳になり、俺は、今、父親と対峙している。

「韓玄 本望 いざ！参る！！」

俺は、堂々と名乗りをあげて、父親の名乗りを待った

「静峰 本望 尋常に！！」

父さんも名乗りをあげて、俺は竹刀を、父さんも竹刀を持ち、互い
に剣をぶつけ合った

父さんの初撃は、攻撃力が高い唐竹割りを繰り出してくる。俺は、
バックステップをとって、右手方向からの横の斬撃を放つ。

「ふっ！」

父さんも、それは避け、右袈裟を放つ。

「はぁあ！」

竹刀の切っ先が左肩の前ぎりぎりを通り抜けるのを確信していた俺
は、体を一回転しながら父さんの右袈裟の軌道に沿って斬撃を放つ。

「がつ！」

此れはまともにヒットし、父さんは堪らず竹刀を落とす。俺は落とした竹刀を蹴り飛ばし、首もとに竹刀を据え、

「俺の勝ちだね」

と声を発した。

「そうだな、お前の勝ちだ。……………お前、強くなったな！うれしいよ、俺は」

父さんは本当に嬉しそうに俺の事を褒めてくれた。

「さて、次は私の番だね？」

母さんの声と共に剣が振り下ろされる。

俺と父さんは紙一重で避ける。

「いきなりあぶないだろ、紅！」

紅、というのは、母さんの真名で、真名とは、自分が認めたときにしか渡してはいけない神聖なもので、勝手に呼んだら殺されても文句はいえないほど大事なものの、…らしい。

というか、この世界なに？中国って言うのは名前で大いぶん分かるんだけど、真名なんてものは存在しなかったと思うし、つまり平行世界^{パラレルワールド}ってことだね、どこの宝石翁だよ！……………つか、なんか引かかるんだよね。真名、つたよね、確か。俺が持ってたゲームの中

でそんなやつがあつたよーな、云々、カンヌン。

「もおらつたー！」

考え事していた俺の脳天に、母さんの容赦ない一撃が加えられ、堪らず、俺は意識を手放すことにした。

「おいっ！大丈夫か？」

男勝りな性格が口調に出ている母さんの声が聞こえてくる。……あの分だと、当然、若くならないだろうな。

「なんか、失礼なこと言われた気がするんでセイ！」

ボゴン、と母さんの手刀が俺の腹にヒット。

「いつてえー！」

身を起こす。母さんは仁王立ちで、俺のことを見下ろしている。

「あ…お早う御座います」

「おはよう、……さあ、続きだ！」

そう言って母さんは俺を引っ張り、無理やり戦わされた。

「それから、3年が過ぎた……」

「なにいつてんだよ、蒼兎」

「あ、悪い、つい……」

俺は、友達と遊んでいた。……ちなみに、俺の真名は蒼兎、生前と

変わらない。字も本望だったし。

「んじゃ、今日はここで終わりにするか」

「おう、じゃあな」

友達と別れ、帰宅する。この村は、小規模で、なかなか、田舎っばいが、そこがまたいい！と母さんが絶賛していた。…それには俺も激しく同意する。生前では、なかなかこういう場所には来なかったからな。

「ただいま」

家に入り、声を掛ける。これだけの動作は、生前、なかなかしなかったことでもある。

「はい、おかえり」

父さんは、いつも穏やかに出迎えてくれる。母さんは、いつも、村の自警団の調練をしていて、この時間はいない。

俺は、ずっと、心のなかで言いたかった言葉を今日、言う事にした。

「父さん」

「なんだい？」

俺の声に真剣さを感じたのか、父さんもこっちに体を向け、真剣に話を聞く体制だ。

「俺さ、この村をでたい。そして、見聞を広めたいんだ」

かれこれ18年、この瞬間を待っていた。

「……………そろそろ母さんが帰ってくるだろう」

「私が帰ったぞ！」

威勢のいい声と共に母さんがこの部屋に顔を出した。

「ん？なんだ、真剣な話のようだね、私がいないと始まらんだろう」

と、父さんの横についた。

ほら、と母さんが促してくる。

「もう一回いうね、この村をでて、見聞を広めたい」

「……………どうだ？行けるか……………？」

「ちょっとまってる、崩、こっちに」

「ああ、分かってるよ」

と、母さんたちは部屋から出て行った。……………大丈夫かな？「断る……！」って言われたらどうしようと思っていたのだが、これで安心？かな。

(崩^{ほう}というのは父親の真名)

ドキドキハラハラの時間を過ごしていると、父さんと母さんが何かを持って部屋に入ってきた。……もしかして、もしかすると……？

「これはな、お前が産まれるときにな、家の前に、置いてあったんだよ。」

母さんが俺に銀色の剣を渡しながら話す。

「この槍もな、置いてあったんだ。」

父さんが蒼い槍を俺に渡してくれた。……俺の武器キタ

(。。。) ！！
嬉しいねえ、どんぐらい嬉しいかと言われると宇宙の大きさが分かったぐらいうれしいぜ！

「よし！蒼兎、この馬も連れていきな」

父さんが俺を手招きし、家の外に連れだして、馬小屋に連れていき、父さんが買ったという黒い毛並みが綺麗な馬を渡してくれた。……名前はコクトと名付けた。

「コクト、よろしくな」

コクトを撫でる。すると、

「ブルルッ」

返事を返してくれた。

「それじゃあな」

コクトと別れ、家に俺！再来！

「さて、蒼兎、これは私からの餞別だ、貰っておけ」

「ありがとうございます」

母さんから渡されたのはお金だった。結構な量があることが分かる。……うちの両親準備良すぎね？なんか不吉なことが怒るかもしれない……と少々不安になっていると、

「それじゃあ、これは、俺からの餞別だ、ほら、蒼兎」

物置からとってきたと思われる手甲、脚甲、肩甲を渡してくれた。

「ありがとう、父さん、母さん」

礼を言ってから、準備をし始める。今は夜に近い、出立は明日の朝になりそうだな……、と考えていると。

「ほら、明日にでるならもう寝な」

と、母さんが言ってくれた。

「それじゃあ、俺、寝るね」

そうして、俺は、母さんのすすめるままに、床についた。

「それじゃあ、行つてきます!!」

「がんばつてな、蒼鬼!!」

「怪我するんじゃないぞ!!」

「応援してるからね!!」

と、友達、世話になつた人からの言葉を背に、俺はコクトの背に跨り、村を立つた。

さらば!!ふるさと!!

俺は、きつと戻るから。………バイニー!!

第二話（後書き）

日進月歩です。

感想、評価、お待ちしていますともはい

それでは、また今度！

第三話（前書き）

日進月歩です。

最近、放射能がどうこういつてますが、デマなどに騙されない様に
お願いいたします。それだけが、俺の、願いです。 「嘘だ
っ！」

第三話

村をでて、3日が経過した。

村や街に寄っては食品を買い、宿に泊まり。それを繰り返しては日々を過ごしている。村人に聞いたところ、ここは天水という所、らしい。董卓が居たところじゃなかったっけ？……あームリムリ、脂ぎって「グヘヘヘヘ」とかいつてそんな奴の所は無理でーす。

という訳で、コクトと俺は平原を彷徨っていた。すると、真昼にも関わらず、流れ星が降った。

「おー、ビューティホー、なんて美しいんだ、都会と違って空気が濁っていないから成せる業だな！」

なんてことを言いながら、流れ星のことなんて放置の構えでコクトと一緒に歩いていた。

「コクト、大丈夫か？」

「ブルルッ」

問題ない、という風に聞こえた。なかなか賢い奴のう

「ヒヒーン」

コクトがいきなり嘶いて、走り始めた。

「ちょ！コクト、俺を見捨てるのかーい」

呼びかけても、戻ってくる気配は無い。そこから導きだされる答えは？ A野垂れ死に

「嫌じゃー!!」

答えが出た瞬間走り出した。すると、黄色い布を体の何処かに巻きつけている人が見えた。近くに男がいる。

「おいっ！お前、身ぐるみ置いてってもらおうか」

黄色い布を巻きつけた男3人組が、あれは……制服じゃね？……
……気のせいだ、うん。変な服を着た男に詰め寄っている。……盗賊じゃね？あの男達、つか、黄色い布って《黄巾賊》の一味じゃなかったっけ？

「コクト！」

呼びかけると、今度は戻ってきてくれた。

「ブルルッ」

「ありがとっ、ここまで連れていってくれて」

礼を言うと、おそらくは黄巾賊だろうと思われる男達にゆっくりと歩み寄っていった

「ん？ここどこ？あんただれ？」

「っるせいぞ！さっさと身ぐるみ全部置いてけや！」

「そーだぞ、置いていかないとひどい目に遭うんだぞ」

あー、駄目だ。我慢ならん。

「ちよつとー君たち？」

「ああ？なんだよ………ってこいつもいいもん持ってるんじゃない…
…身ぐるみ全部置いていってもらおうか」

盗賊の一番ちつちやい奴が詰め寄ってくる。

「なあ、青年？困ってる？」

俺は、無視して、変な男に声を掛ける。

「すげえ困ってる」

「おい、てめえ！聞いてんのかよ！」

盗賊は剣を抜き放つと斬りかかってきた。

「危ないっ！」

剣がゆっくりと迫ってくる。

「おせえよ、阿呆！」

リーダー格の男を蹴り飛ばし、呆然としている二人も殴って仕留める。

「うう……ガハッ！」

リーダー格の男は気絶していない様なので、

「セイっ！」

「グハッ！」

手刀で仕留めました。あんが簡単に出来ますた。………ww

「おい、あんた、大丈夫か？」

「……ああ、大丈夫だ、ありがとう、俺の名前は本郷 一刀」

「名前は韓玄 字は本望だ、よろしく」

自己紹介を終えると、すこし、一刀の質問に答えていた。

すると、3人組の女が馬に乗ってやってきた。

「貴様っ！その者から離れろ！」

サイドテールつつうのかな？かなりの美少女が薙刀っぽい形状をした獲物を俺に向けていた。

「えっ？俺ですかい？」

「そうだっ！貴様だ」

一刀はそそくさと小さな女の子に手を引かれてピンクの髪をした女の子の方についてしまった。一刀許しまじ。

「ハアアー！」

「うわっ！」

ガキンツ　と音を立てて受け止めてくれた俺の手甲、サンキュー母さん！

「なかなかやるなっ、賊のくせに……ヤアアアア！」

「ちょ！危ないだろ！」

バックステップで躲すと、背中に吊り下げていた槍を取り出す。

「ハアアアアア！」

今度は問答無用で斬りかかってきやがった。

ガアアアン　こいつ、力、メチャ×2あるんですけども。

「ちょっとー、話聞いてくれませんか！」

「賊の話を聞く理由はない！」

この人完璧に頭に血上ってますよ。一刀が呼びかけている姿が見え

るのに全く反応しないもの。

打ちのめすのもやむ無し。と判断した俺は腰に吊り下げていた銀の剣に手を伸ばそうとした、その時に、

「にやにや！愛紗、やめるのだ！」

「鈴々！？離せ、こいつは賊だぞ！」

「愛紗は、賊に攻撃を受け止められるのだ？」

「そんな訳あるか！しかし、現に天の御使い殿はこの男に」

「ちよつといいかな？あの男に俺は助けられたんだぞ？」

あ、なんか状況が混乱してきた。いいぞいいぞ、もっとやれ一刀！俺の命のために！！

「そうなのですか？」

愛紗、と呼ばれた女の子は一刀に聞いている。

「うん、盗賊に襲われていたところを助けてもらったんだ」

「そうだったのですか……」

「愛紗ちゃん、あの人は悪く無いみたいだよ」

「しかし……」

しーらね、おれなんの関係もしてません。ので、

「コクト、こっちこっち」

手を叩いてコクト呼ぶ。

「ブルルッ」

「おーいい奴だな、よしよし」

撫でて、ご飯をあげていた。

ちよんちよん、と背中に感触がある。

「おにいちゃん、ちよっとこっちにくるのだ！一人だけ話に参加しないのは可哀想なのだ！」

俺、そういう目で見られてたのね……………

（Ｔ―Ｔ）鬱だ……

「そこのおにいちゃん、名前、教えてくれるかな？」

「桃香様、危険です、お下がりください」

「あー、大丈夫だから、ねっ、ほら」

槍を背中に吊って、手を上に上げる。

side 関羽

桃香様と鈴々とともに、流星が墜ちたところへと向かっていた。

墜ちたと思われる場所に行くと、二人の男がいた。一方の男は

「桃香様、危険ですので、下がっててください。」

「うん、分かった。よろしくね、愛紗ちゃん♪鈴々ちゃん♪」

「行ってくるのだ！」

「貴様っ！その者から離れろ！」

とつさに、声を掛けた者が危ない、と感じ、天の御使いと思われる人物から遠ざけた。

「えっ？俺ですかい？」

惚けたような声を出しているが演技に違いはない、この男はなかなかの武人であることを私は確信している。

「そうだっ！、貴様だ」

鈴々が御使い殿を避難させた。これで、この者を打ち倒せる！

「ハアアー！」

「うわっ！」

なんて力だ、全然偃月刀が動かない…………

「なかなかやるなっ、賊のくせに…………ヤアアアア！」

「ちょ！危ないだろ！」

男は後ろに跳躍して躲し、背中の獲物に手を掛けた。

あれは……………槍か、だが、あそこまで蒼い色をした槍なんて見たこともない。くっ！なにか殺られる前に倒さなければ！

「ハアアアアア！」

ガアアアン と音をたてて防がれる。

「ちょっとー、話聞いてくれませんか！」

「賊の話を聞く理由はない！」

何を戯言を！油断したところを一突きする魂胆なんだろう、私は騙されん！

「にやにや！愛紗、やめるのだ！」

「鈴々！？離せ、こいつは賊だぞ！」

「愛紗は、賊に攻撃を受け止められるのだ？」

「そんな訳あるか！しかし、現に天の御使い殿はこの男に」

「ちよつといいかな？あの男に俺は助けられたんだぞ？」

「どういう事だ？あの男が御使い殿を襲ってるものだと思っていたのだが…」

「そうなのですか？」

嘘をつくとは思えないが、聞いてしまった。

「うん、盗賊に襲われていたところを助けてもらったんだ」

「そうだったのですか……」

「愛紗ちゃん、あの人は悪く無いみたいだよ」

「しかし……」

あの男は賊ではなかったということか……勘違いで闘いを仕掛けてしまったのか、私は……

「そこのおにいちゃん、名前、教えてくれるかな？」

「桃香様、危険です、お下がりください」

「あー、大丈夫だから、ねっ、ほら」

男は槍を背中に吊って、手を上げている。……この男、案外、いい奴かも知れない。

「えーと、俺の名前は韓玄 字は本望、よろしく」

「私の名前は劉備、字は玄德だよ、よろしく」

「よろしく、劉備殿」

「鈴々は張飛なのだ、字は翼徳なのだ！」

「よろしく、張飛ちゃん」

韓玄か……いい名前だな……って私はなんでこんな事考えているんだ！

「……我が名は関羽 字は雲長 先ほどは申し訳ございません。韓玄殿」

照れた為、すこし間が空いてしまったが気にしないようにしよう。

「よろしく、関羽殿」

韓玄……か

第三話（後書き）

すいません、微妙な終わり方で、

評価、感想 おねがいします。

お詫び（前書き）

大変申し訳ないと思っています。

お詫び

この度、日進月歩の利き手である左手に重大な故障が起きました。

それは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・《骨折》
《です。

すこしばかり安静にしてろ。という医者判断により、投稿スピードが落ちる。という弊害が起きました。

由々しき事態です。大変です。変態です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・本当に申し
訳ないです。

許していただけののなら、感想お待ちしております。

遅くなってしまった小説、真・恋姫無双 蒼の槍 銀の剣 をこれからオネガイシマス。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

すいません。

第4話（前書き）

日進月歩がログインしたりログアウトしたり、忙しかったです。

第4話、評価、感想してくれると嬉しいねえ。

第4話

Side 韓玄

「コクトー、これから何処に行くー？」

「ブルルッ」

「そっかー、北の方に行きたいのかー、寒いけど、大丈夫かー？」

「ブルルッ」

「なに？「大丈夫だ、問題ない」だと？なかなかいいこと言っじゃないか」

「ブルルッ」

韓玄です。絶賛彷徨い中っです！

こんなやりとりを何回繰り返しただろう……。劉備達から別れた後は悲惨だったよ。

一日三回盗賊とエンカウトして、残らずぶちのめして近くの村に縛って捨てて、食料は減って行く一方だし。

「おー、コクトー、村が見えてきた……………よ……………？」

村はかなり大規模で、街と言っても差し支えない位の規模だった。

…その街だが、黒い煙に包まれ、周りには人が群がっていなかったらもつと気楽に街に入れただろう。

「コクト！急げっ！」

俺は、街へと急いだ。

………間に合ってくれ！

side 楽進

くっそ……盗賊どもが群がってきて倒しても倒してもキリがない……

「風ちゃん、そっちにもいったなのー！」

于禁こと沙和がこちらに呼びかけてくるが返事を返す余裕もない。

「風！もうあかん！西の方の柵はもう耐え切れんで！」

李典こと真桜もこちらに声を掛けてくれるが内容が内容なので気が落ちてしまう。

「はあ！」

拳で周りの盗賊の顎を正確に打ちぬき戦力を削っていくのだが相手の数によってどうしても防戦一方になってしまう。

「やあ！」

時々、足に気弾を纏わせて放つ。爆発音と共に人間が吹っ飛んでいく。……見てて気持ちのいいものではないのですが盗賊の顔を打ちぬく。

振り返りざまに後ろにいた者に拳を放つ。パシッ と受け止められた。これは私も驚いた。盗賊ごときに拳を止められるとは思ってもいなかった。その為、戦場では致命的すぎる時間呆けてしまった。

「もらった！」

盗賊の一人が槍を突き出してくる。

「しまっ！」

避けようとするが避けきれない、と判断する。前に居る正体不明の盗賊も居るので隙を晒すことになる、その為、行動が一瞬だけ遅れてしまう。

——避けきれない！

来るべき衝撃に備え、知らず知らずの内に目を閉じてしまっていた。
…一秒、…二秒。来るべき衝撃は来ない。

「ぐあー！」

先ほど、私に槍を突き出してきた男の声がする、恐る恐る目を開けると、そこには、先ほど私の攻撃を受け止めた謎の盗賊が同士うちをしていた。

「大丈夫か？」

男が、問いかけてきた。

s i d e 蒼兎

ちくしょう……間に合ってくれ！

戦場をうろつろとしていた戦場カメラマンの俺は、一人の少女に殴られそうになった。拳で人を吹き飛ばしているのを見て近づいていたら殴られそうに……怖かったわー

「もらった！」

盗賊が少女に槍を突き出した。

「しまっ！」

まじかよ！俺のせいか！

腰から剣を抜き放ち、胴に剣を見舞う。

「ぐあ！」

盗賊が断末魔を上げて絶命した。……初めてだな、人、殺したの。

「大丈夫か？」

外見に外傷は無かったのだが、念の為に聞いておく。……少女が此方を向く……。めっちゃかわええ……

「はい、大丈夫です、ありがとうございました。」

「無事なら良かった、俺の名前は韓玄 字は本望、よろしく」

「私は楽進 字を文鎌といいます、真名は凧です」

ちよ！

「いいのか？真名許して」

正直、真名与えられるほど良い事してない……

「命を救ってもらったのですから当たり前です」

この子、結構真面目っ子なんだ！

「えーと、うんじゃ、俺の真名は蒼兎、改めて、よろしく」

戦場の最中だが、このぐらいいはしてもバチは当たらないだろ……幸い、凧を殺そうとしていた盗賊はすでに事切れているし、他の盗賊はこ

の周りにはいない。

「よろしく願います。蒼兎様」

………むっちゃカワエエ。

「様付けはちよつとね………」

嘘です、大好きです。

「しかし、私は助けられたのですから………」

凧が此方を見てくる、……断れなくなつた

「……分かつた、様付けでもいいよ」

「ありがとうございます」

「んじゃ、盗賊どもをぶつ飛ばしますか」

そうそう、景気づけにパーッとね……

「はい、分かりました、それでは、ご武運を」

そう言つて凧は村の方に駆けていった………そういや、楽進つて有名な武将だった気が………つーか、今さらだけど劉備とかも女の子………

……女の子!?

「もしかして………っ!」

考え込もうとした瞬間、盗賊どもが此方に来ていた。…くそっ！数が多すぎるだろ！

「ちくしょうっ！」

小声で毒づいた後、盗賊の集団に身を躍らせた。

「我が名は韓玄！尋常に！いざ！！」

尋常じゃないけどな……と内心で呟く。

「なんだ！こいつ！」

「馬鹿じゃねえの？この数分からないのかよ」

「さっさと殺そう…がっ！」

近くで剣を突きつけた男を割と本気で殴った。

「ぐたぐたうるせエ！韓玄本望！ここに居るぞ！！」

盛大に、他の盗賊どもを引きつけるように声を上げた。

「うおおおおお！」

腰から剣を抜き、斬りつける、その間にも声を聞きつけた盗賊がやって来る、その数、100を超える。

おそらくは、この街を襲った者共の半分は居るだろうと考える。

「くそっ！こいつ強いぞ！」

「相手は一人だ、囲んで突き殺せ！」

このやりとり、見たことがあるような……

「うおい！」

あぶねエ、後もうちよいで死ぬところだったぜ。

「らっしや！」

反り返った反動で突いてきた男を斬りつける。

背中に手を伸ばし、槍を取り出す。……密かに練習してきた秘密技、とくとご覧あれ！

「おおおおお！」

左手に持った槍をランダムに突き出し、引く間に剣で斬りつける。

「ぐうあ！」

「うわあ！」

……不謹慎だが、皆、同じような悲鳴を上げてらっしゃる……

「この韓玄本望！倒せるものはおらぬか！うおおおお！」

斬る、突く、突く、斬る、突く、突く、斬る、斬る

ランダムに、体が命じるままに剣を、槍を動かす。

賊共はこの動きに従いてけず、斬られたり、突かれたり。

「はあ、はあ……はあ……はあ、ゴフツ！」

……特に大きな怪我を負わずに、百人を殲滅することができた。
……備考、とにかく疲れるので要体力作り。

「……………ふう」

一気に今日の疲れが出てきた。初めての人殺し、その後も沢山、殺した。

感覚が麻痺してる。殺した、という実感が沸かない。

。
……
疲れたよ、
パ
ラ
ッ
シ
ュ。
。

第4話（後書き）

盗賊の一団がログアウトしました。

蒼兎もログアウトしたけど、「断る!」といわれ、なかなかログアウトできませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6394r/>

真・恋姫夢想 蒼の槍、銀の剣

2011年10月8日22時08分発行